

子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ

野村 幸子*1 河上 智香*2 長谷 典子*3 藤原 千恵子*2

*1 県立広島大学保健福祉学部看護学科

*2 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

*3 四天王寺国際仏教大学

2006年 9月12日受付

2006年12月12日受理

抄 録

本研究の目的は、入学したばかりで小児看護学受講前の学生は、子どもとの接触体験をどの程度持っているのか、またどのような子どもイメージを持っているのか、子どもとの接触体験は、イメージの形成にどのように影響するのかを明らかにすることであった。対象者は、研究の目的に同意が得られた2大学の1年生143名である。結果は、接触体験で最も多い項目は、「赤ちゃんを抱く」や「子どもとの遊び相手」で世話に関する体験は少なかった。接触体験やきょうだい数が多いほど、子どもの『行動特性』からくるイメージは肯定的となっていた。他のイメージの側面には影響がみられなかった。また接触体験の多さは、子どもへの関心とも関連がなかった。むしろ接触体験が多いと苦手意識になることも示唆された。学生は、子どもへの関心は高いが、そのイメージは、子どもとの浅い関わりや外観から得られるイメージであることがわかった。

キーワード：看護学生，子ども，イメージ，接触体験

はじめに

90年代に入り社会構造はますます変化し、日本の人口に占める15歳未満は、2005年13.6%と世界で最も少子・高齢化の進行した国となった。女性が生涯に生む子ども数の平均値を示す合計特殊出生率が平成元年1.57となり、「ひのえうま」より少ない数値として社会にショックを与え、エンゼルプラン作成や次世代育成支援など国をあげての少子化対策が始まった。しかし、なかなか効果が見られないのが現状である。

次世代を担う子どもを健全に育てていくことは、社会の中で今を生きている者としての責務でもあり、子育ての基盤となる子どもに対する感情は、元来母親に備わっているものではなく、また母親が一方的に赤ちゃんに対して働きかけて生じるものでなく、子どもとのやりとりの中で、子どもからの反応によって育まれていくものという。そのような親子の相互作用の中で親として発達していくといわれている¹⁾。

小児看護の役割は、病児だけでなくすべての小児が健康で幸せにあるために、小児の健康を守り、小児の望ましい成長発達を促すよう、必要に応じて養育者を指導し、援助し、あるいは支えることである。吉武²⁾は、小児看護の特徴を考えると、ほとんどすべては、小児の特徴がそのまま現れたものであるという。それゆえ、小児看護の実践に際しては、小児の特徴の理解が前提として重要であり、小児看護学を教授する際も小児の成長発達の特徴の理解を重視している。

しかし、学生にとっては、少子化社会の生活環境において子どもと身近に関わる機会がますます減少する中、子どもの理解が困難であり、臨地実習においても子どもとどう関わればよいか戸惑う学生も少なくない。小児看護学の授業をするにあたって、時代の変化とともに学生がどのような子ども観をもっているか、またその要因について把握することは必要なことである。さらに日々の生活の中で身近に子どもと関わることの少なくなった若い人々は、子どもに対してどのようなイメージをもち、それはどのように形成(発達)していくのか、10代の妊娠・出産の増加に伴う育児不安や児童虐待の予防に向けた親準備性の獲得においても子どもイメージがどのように形成されるのか明らかにすることは意義のあることと考える。

先行研究を概観すると子ども観、イメージについて小児看護実習前後や小児看護学履修前後の変化をみた研究^{3) 4) 5) 6)}や子どもへの認識、イメージの要因として接触体験との関連をみた研究は多くみられ^{7) 8) 9) 10)}、その多くは接触体験が「子どもの世話への関心」に関連していることを報告している。子どもイメージは肯定的な反応が多いが、子どもの理解につながるイメージの内容構造からの分析は多くない。「子どもイメージ」をどのように測定するか、子どもとの接触体験や

属性がイメージにどのように関連しているかも文献により異なった見解がみられ明確化していない。

そこで、本研究では、看護を志望し入学したばかりの学生は、子どもに対してどのようなイメージを持ち子どもを理解しているのか、また子どもの世話に対する関心は、どの程度もっているのか、その実態とイメージにおける関連要因を明らかにすることを目的とした。

I 研究方法

1) 調査対象：4年制看護学専攻の1年生。

地方にあるA大学63名、都市圏にあるB大学80名の合計143名。

2) 調査期間：2005年4月～5月

3) 調査方法：自記式質問紙による方法

調査は、小児看護学に関する授業の開始前に、先行研究を参考に作成した質問紙について研究の目的、倫理的配慮を口頭で説明した後、調査用紙を配布し無記名にてその場で記入されたものを回収した。

4) 調査内容：

- (1) 子どものイメージは、河上ら¹⁰⁾(2003)が先行研究¹¹⁾を参考に子ども観の測定に有効性が示された形容詞を用いSD法で作成した構成概念妥当性、内的整合性が検討され4因子から構成される下位47対の形容詞項目を用いた。子どものイメージ因子は「すばやいーのろい」「たくましいー弱々しい」などの項目のある『行動特性』、「好きなー嫌いな」「愉快なー不愉快な」などの項目のある『好感度』、「落ち着いたー落ち着きのない」「静かなーうるさい」などの『自律性』、「優しいー厳しい」「幸福なー不幸な」などの『情緒性』から構成されている。それぞれの対の形容詞項目については3歳ぐらまでの乳幼児に対する自分のイメージにより近い箇所を7段階評定で選択してもらい得点とした。得点が高いほど子どもイメージが肯定的になっていることを示す。
- (2) 子どもとの接触体験については、藤原ら⁷⁾を参考に乳幼児の日常生活の世話を中心にした18項目について体験の有無を問うた。‘かなりしたことがある’から‘全く機会がなかった’まで5段階評定で「乳児期」「幼児前期」「幼児後期～小学生」と発達段階にごとに世話に関する項目をあげ作成した。
- (3) ジェンダーによる影響を知るために鈴木¹²⁾による性役割態度に関する1因子15項目で構成された尺度を用いた。
- (4) 乳幼児への関心をみるために、田中ら¹⁴⁾を参考に「乳幼児が好き」「触れたい」「遊びたい」「守

ってあげたい」の4項目を「とても当てはまる」から、「まったく違う」の4段階評定で作成した。

- (5) 対象者の基本的属性として、性別、きょうだいの有無ときょうだい数、身近に3歳までの幼い子どもがいるか、中学生・高校生時の保育実習（触れ合い体験）の有無等について作成した。
- 5) 分析方法：イメージ因子、接触体験の有無について、大学間、男女別の差がないことをt検定、カイ二乗検定で確認した後、子どもイメージを従属変数に、接触体験や属性を独立変数にしてその関連をt検定、一元配置分散分析で解析した。有意水準5%未満を採択した。また子どもイメージと接触体験、乳幼児への関心についてピアソンの相関係数を求めた。データ分析には、統計解析ソフトSPSSバージョン12.0を用いた。
- 6) 倫理的配慮：質問紙の回答は、研究目的および無記名で対象者が特定されないこと、調査への参加は本人の自由意志であること、答えたくないことについては答えなくてよいこと、参加し途中でやめてもよいこと、また結果は統計的に処理し個人に迷惑はかけないこと、研究目的以外に使用しないことを文書に明記し、口頭でも説明し協力を得た。

II 結果

質問紙は、A大学63名、B大学80名に配布し、それぞれ回収率は100%であった。そのうちイメージ項目の回答に不備のあった2名を除き有効回答は141名（有効回答率98.6%）であった。性役割に関する項目は、B大学の回答の多くに不備がみられたため今回は分析対象から除いた。また乳幼児への関心について、「子どもが好き」以外の3項目ではB大学の回答に不備があり、分析対象をA大学61名とした。性差は育児に対する意識に相違があると推測されるためA大学とB大学の男女数の差を検討し差がないことを確認した。また、子どもイメージ、接触体験においても男女差、大学間に有意差はみられなかったため以下A大学とB大学を合わせて分析した。

1 対象の属性

性別では、表1に示すように男子15名（10.6%）、女子125名（88.7%）であった。大学による男女の人数に差はみられなかった。年齢は最小18歳、最大31歳の範囲で18～19歳が87.9%を占め平均18.6歳（SD1.38）であった。きょうだい数では一人っ子8名（5.7%）、二人～三人が最も多く両方で124名（88%）であった。四人きょうだいは7名（5.0%）おり、平均きょうだい数は2.5人であった。「10歳以上年の離れた弟・妹の有無」では、「いる」9名（6.8%）、

「いない」124名（93.2%）であった。大学間による差はみられなかった。

「小学校低学年までの母親の仕事の有無」では、「働いていた」71名（50.4%）、「専業主婦」68名（48.2%）とほぼ同数であった。「幼児期の通園場所」は「幼稚園」が104名（73.8%）で「保育所」は33名（23.4%）であった。大学別では、「幼稚園」はA大学36名（59%）、B大学68名（85%）とB大学の方が「幼稚園」に通園している割合が高く、A大学では「保育所」に通所している割合が高かった。「学童保育」は大学間による差はなく、「通っていた」20名（14.2%）に対し、「通っていない」者が120名（85.1%）と多かった。

「身近に3歳までの幼い子どもの存在の有無」では、「いない」110名（78.0%）と多く、「いる」は31名（22.0%）であった。その関係は、自由記述で回答のあった15名をみると近所の子やいとこがそれぞれ6名（各40%）で、甥・姪2名（13%）、弟1名（6%）であった。

「中学校や高校での保育実習体験（触れ合い体験）の有無」では、A大学では40名（65.6%）が体験あり、B大学35名（43.8%）よりその割合は多かった。全体では「体験有り」がほぼ半数の75名（53.2%）であった。保育実習（触れ合い体験）の内容は、体験者のほぼ全員74名が「子どもとの遊びや世話を実際にした」と答えており、その多くが半日から1日程度であった。

2 子どもイメージ因子

子どもイメージ47項目を得点化して各因子の項目数による合計の平均得点を出し分析した（表2）。イメージ質問紙の信頼性は、全項目および各因子についてクロンバックの α 係数でみた。47項目全体の α 係数は0.91であった。因子別の α 係数は、『行動特性』が0.84、『好感度』0.91、『自律性』0.76、『情緒性』0.69であった。

それぞれの因子ごとに大学別、男女別に平均得点との関連をみたが、有意な差は見られなかったため以下、A・Bの2大学を合わせて分析を進めた。因子の平均得点は、表3に示した。「好きな」「明るい」など13項目で構成された『好感度』が5.89（SD=0.73）で最も高く、次に、「優しい」「豊かな」など7項目で構成された『情緒性』が5.37（SD=0.72）と高くなっていた。「落ち着いた」「安定した」など11項目で構成された『自律性』は、3.17（SD=0.74）と4因子の中で最も低い平均得点を示していた。次に低いのが「すばやい」「たくましい」などの16項目から構成された『行動特性』が4.39（SD=0.72）であった。

3 子どもイメージ因子と基本的属性の関連

基本的属性とイメージ因子との関連についてt検定、一元配置分散分析をした結果を表3に示した。「きょうだいの有無」では、『行動特性』に‘いる’が4.43 (0.68), ‘いない’ 3.72 (1.09) で‘いる’方が高く、有意な差がみられた。さらにきょうだい数をみると、一人と二人の間で『行動特性』に有意な差がみられ、一人より二人が高くなっていった。二人以上のきょうだい数の間では有意な差はみられなかった。

「中学校・高校での保育実習体験の有無」でも同様に、『好感度』『行動特性』『情緒性』で体験‘あり’が、高い得点となっていたがいずれも有意な差ではなかった。

幼少期の母親の就労状況や、通園場所、学童保育の有無、「身近に3歳までの子どもがいるか」については、各イメージ因子との差はみられなかった。

4 子どもの世話に関する接触体験の状況と子どもイメージ因子の関連

5段階評定でみた子どもとの接触体験の結果、「かなりしたことがある」が少なかったため、「かなりしたことがある」「どちらかというとしたことがある」を‘体験有り’に「どちらかというとしたことがない」「したことがない」「全く機会がなかった」を‘体験なし’の2群に分類し分析した。‘体験あり’の割合を図1で示した。60%以上に最も多く体験がみられたのが、「幼稚園や小学生の遊び相手」103名(73.0%)、「3歳ぐらいままでの幼児の遊び相手」93名(66.0%)、「赤ちゃんを抱く」88名(62.4%)であった。最も体験の少ない項目は「赤ちゃんを半日以上一人で世話をする」16名(11.0%)、「赤ちゃんをお風呂に入れる」18名(12.8%)、「3歳ぐらいままでの幼児をお風呂に入れる」20名(14.2%)など長時間の世話と清潔に関する項目であった。続いて体験者20%以下の項目は「3歳ぐらいままでの幼児のトイレの世話をする」「赤ちゃんのおむつ交換」「3歳ぐらいままでの幼児を半日以上一人で世話をする」で長時間の世話と排泄に関する項目であった。

各イメージ因子を従属変数に、接触体験の有無を独立変数におき、各項目について関連をみた(表4)。接触体験の有無による差が見られた項目は、「赤ちゃんを抱く」という体験項目で『好感度』『情緒性』において‘体験有り’に平均得点が高く、有意な差がみられた。また「3歳ぐらいままでの幼児のトイレの世話をする」では、『行動特性』『好感度』共に‘体験有り’に得点が高く有意差がみられた。「泣いている赤ちゃんをあやす」では、『自律性』因子で‘体験なし’が‘体験有り’より高い得点となっていた。

5 乳幼児への関心と子どもイメージ因子との関連

乳幼児への関心とイメージ因子との関連を表5に示した。「乳幼児が好きか」という質問に対し、‘とてもあてはまる’‘どちらかというあてはまる’合わせて60名(98.4%)が「好き」と答えていた。‘どちらかという違う’が1名(1.6%)で、‘まったく違う’すなわち嫌いと答えたものはいなかった。「乳幼児に触れたい」という直接的行動については、‘とてもあてはまる’‘どちらかというあてはまる’と答えたものが合わせて59名(96.8%)で‘どちらという違う’が2名(3.2%)いた。「乳幼児と遊びたい」という、より積極的な質問については、‘とてもあてはまる’‘どちらかというあてはまる’が合わせて57名(93.5%)であった。「守ってあげたい」という項目では、‘とてもあてはまる’‘どちらかというあてはまる’が合わせて58名(95.1%)であった。

次に、子どもイメージ因子との関連について、等分散であることを確認後、一元配置分散分析をした。「乳幼児が好き」では『行動特性』『好感度』『自律性』『情緒性』のいずれの因子でも‘どちらかというあてはまる’が‘とてもあてはまる’‘どちらかという違う’より平均得点が高くなっていったが、有意な差はみられなかった。また、「乳幼児に触れたい」「乳幼児と遊びたい」「守ってあげたい」のいずれの項目においても、各イメージ因子との間に有意差はみられなかった。しかし、「乳幼児に触れたい」「守ってあげたい」では、『行動特性』において‘どちらかという違う’に得点が高くなっていった。

6 子どもとの接触体験、子どもへの関心とイメージ因子の関係

18項目の接触体験と4つのイメージ因子の関係を相関関係で分析した。有意な相関係数を示したのは、「赤ちゃんを抱く」が『好感度』間でピアソンの相関係数(以下rとする)0.26、『情緒性』間においては、rは0.24で弱い正の相関であった。「おむつ交換」は『行動特性』間でrは0.21、「赤ちゃんの衣服を着替えさせる」は『行動特性』間でrは0.23、「泣いている赤ちゃんをあやす」は『情緒性』間にrが0.20でいずれも弱い正の相関があった。幼児では、「3歳ぐらいままでの幼児のトイレの世話をする」と『行動特性』間にrが0.23、また「幼稚園や小学生を半日以上世話をする」の項目では『行動特性』間にrが0.22といずれも弱い正の相関であった。

赤ちゃんの世話に関する8項目をまとめて「乳児との接触体験」とし、3歳ぐらいままでの幼児に関する世話7項目を「幼児との接触体験」、幼稚園や小学生の子どもの世話に関する2項目を「幼稚園・小学生との接触体験」と3つの発達段階に分類してそれぞれのイメージ因子との相関関係を分析した。相関係数を表6に

示す。

「乳児」「幼児」「幼稚園・小学生」と3つの発達段階別の接触体験とイメージ因子の間では、「乳児」と『行動特性』の間に r が0.20、「幼稚園・小学生」と『行動特性』間に r が0.22と弱い正の相関があった。他は相関がみられなかった。

子どもへの関心のそれぞれの項目とイメージ因子との関係では、「乳児が好き」と『好感度』間に r は0.27と弱い正の相関があった。他はほとんど相関がみられなかった。

子どもとの接触体験における3項目間の相関を見ると、「乳児との接触体験」と「幼児との接触体験」では、 r が0.89と強い正の相関があり、また「乳児」と「幼稚園・小学生」の間では r が0.56、「幼児」と「幼稚園・小学生」間では、 r が0.61と中程度の正の相関があった。

子どもへの関心では、「乳児が好き」「乳幼児に触れたい」「乳幼児と遊びたい」「守ってあげたい」のいずれの項目間においても、有意な強い正の相関があった。

また、4つのイメージ因子間では、それぞれの因子間の相関係数はいずれも有意であり、『自律性』との間を除いて中程度から強い正の相関であった。

Ⅲ 考察

1 子どもとの接触体験の状況

子どもとの接触体験の有無は藤原ら⁷⁾による約20年前の調査によれば「毎日、時々、たまに」を合わせて約94%、「赤ちゃんを抱く」は約64%、「授乳」25%、「幼児との室内遊び」は約90%である。今回は体験の頻度については訊ねていないが、最も多い「幼稚園児や小学生の遊び相手」が約7割で「赤ちゃんを抱く」「3歳ぐらいまでの幼児の遊び相手」は約6割であった。質問項目が同じではないため厳密な比較はできないが、「授乳・食事」や「排泄」「着替え・清潔」など子どもの世話については、前回同様に少ないものであった。「赤ちゃんへの授乳」と「幼児との遊び」が大きく減少している。「授乳」での減少は、母乳による育児が広く浸透し、人工栄養であるミルクを他者が授乳する機会が減少していることによるものと考えられる。乳幼児との接触体験では、「抱く」「あやす」「遊び相手になる」など表面的に関わりの体験となっていることがうかがえた。幼児との遊びの減少からは、少子化社会の影響かやはり子どもとの関わりが減少してきていることが示唆された。

2 学生のもつ表面的な子どものイメージとしての『好感度』

本調査の結果では、子どもに対する4つのイメージ

因子のうち、『好感度』が最も高い得点であり、学生は子どもに対してかわいらしく、陽気で、愉快的、明るく、活発な等、肯定的なイメージを持っていることがわかった。また、「乳幼児が好きか」という問いに対して「とてもあてはまる」「どちらかというあてはまる」と合わせてほぼ全員の98%の学生が「好き」と答えていた。これは、先行研究の岩本ら¹¹⁾の結果より多く、河上¹⁰⁾の結果96.1%に近い、子どもへの関心を寄せる肯定的な結果であった。小児看護をこれから学んでいく学生として、「乳幼児が好き」ということはとても好ましいことであり、子どもへの関心も高いのではないかと期待したいところである。そこで「乳幼児が好き」と答えた学生は、子どもをどのようにイメージしているのかを相関関係のみどころ、本調査では、「乳幼児が好き」は『好感度』との間に弱い有意な正の相関関係がみられた。『好感度』は「好きな」「愉快的」「かわいらしい」「明るい」などどちらかという子どもを外観から受ける極めて表面的なイメージと考えられる。また接触体験項目との関連では、「赤ちゃんを抱く」の「経験あり」が『好感度』『情緒性』因子で高い得点を示し、肯定的なイメージを持っていた。このことから『好感度』因子は、抱いた赤ちゃんの心地よい感触からくるもので深い関わりを必要としないイメージ因子であると推察される。

3 接触体験からみた子どもへの関心

1) 接触体験に基づかない「乳幼児が好き」と流動性があるイメージ

接触体験から「乳幼児が好き」ということの意味を考えたい。先行研究によれば、子どもが「好き」と答えたものに接触体験が多く³⁾、看護学生の子どものイメージは、子どもに対する好き嫌い、苦手意識、子どもとの接触体験により子どもイメージの定着・形成に影響していた¹⁰⁾とある。別の報告では、「子どもとの接触体験」と「子どもへの関心」に関連はなかった¹³⁾。今回の結果では、「接触体験」と「乳幼児が好き」「乳幼児に触れたい」「乳幼児と遊びたい」「守ってあげたい」など子どもへの関心には、相関関係はみられなかった。ゆえに、「乳幼児が好き」は、接触体験に影響されずに子どもの外観から受ける、極めて表面的な感情としての「好感度」に影響を与えていることがうかがえる。学生が持っているイメージの中で最も高い得点でもある「好感度」は、子どもとのさまざまな体験をしていく中で、変化する可能性のある流動的なイメージとも考えることができよう。

2) 子どもへの関心と子どもと関わりたい意欲

「子どもが好き」「乳幼児に触れたい」「乳幼児と遊びたい」「守ってあげたい」などのそれぞれ4つの項目間に有意な強い正の相関があったことより、「子どもが好き」ということは、直接子どもに「触れたい」「遊

びたい」という関わりに対する行動的な関心をもっていえることができる。しかし、子どもの特性を多面的に理解したうえでの関心ではないことに留意しつつ、状況に応じて変化する子どもの反応が多面的に理解できた上での関心となるような働きかけが必要と考える。また、子どもへの関心の高さは、子どもを「守ってあげたい」と看護者として弱きもの、小さきものに対しての『保護する』という母性性との関連も示唆されることがわかった。このことは、看護を志望し入学した学生の特徴なのかどうかは不明だが、看護する心として育んでいきたい点でもある。

4 生育環境、接触体験からみた子どもイメージ『行動特性』

花沢¹⁴⁾は、児に対する感情を「対児感情」として、児を肯定し受容する方向の愛着的感情としての『接近感情』、児を否定し拒否する方向の嫌悪的な感情としての『回避感情』の2側面をあげている。高校生や大学生を対象に対児感情を調査した結果、生育過程において児童期から乳児との接触体験を多く持った高校生・大学生は、愛着的方向での対児感情が高く、対児感情の発達には、男女という性的要因よりむしろ生育史上の体験が大きく影響を受けると述べている。赤ちゃんに「触りたい」「抱っこしたい」「あやしたい」「育てたい」などの育児動機も、同様に小学生のころから赤ちゃんと多く接してきた人に高いことを明らかにしている。本研究では、学生の子どもの接触体験を成育史から考えるとき、きょうだい数や、身近な子どもの存在、幼少時の生育環境、学童保育での生活などが影響すると想定し質問項目としたが、きょうだい数を除いて有意な差はみられなかった。

きょうだい数は平均2.5人であり、少子社会にもかかわらず先行研究^{5) 6)}の2.4～2.6人とほぼ変わりなかった。幼少期は、母親が就労していたものと専業主婦であったものとほぼ半数ずつであり、そのことから保育所が大いに利用され、子ども同士の接触体験も豊富かと考えられたが、実態は幼稚園への通園が約7割で、保育所への通所は約2割であった。母親の就労形態は問うていないので幼稚園入園までの保育環境についての詳細は不明であるが、対象者の幼少期1980年代後期の生育環境としては、保育所の利用は少ないことがわかる。また学童保育の利用者は、約15%である。学童保育の充実が全国的に推進されたのは、次世代育成支援対策が始まってからのことであり、対象者が学童期であった1990年代半ばは学童保育の利用が少ないことがわかった。「身近に3歳ぐらまでの幼い子どもがいるか」という質問に対しては、約22%が「いる」と答えている。その子どもとの関係は、いとこや近所の子ども、甥・姪であり、先行研究⁸⁾にもあるように、ボランティアなどは含まれていなかった。

近所の子どもが少なからず存在したのは、地域社会との関係性が乏しいといわれる昨今、近隣との関係性が保てていると考えられる。しかし、場としての生育環境は、子どもイメージに関連がなかった。このことは、生育環境における子どもとの接触体験には場だけではないさまざまな要素が影響していると考えられる。

一方、「乳児」や「幼稚園・小学生」との接触体験をもつものは、イメージ因子との相関において、『行動特性』と正の弱い関係があり、接触体験が多いほど、肯定的なイメージを持っているといえた。また、「3歳ぐらまでの幼児のトイレの世話をする」項目において、「経験あり」が高い得点で肯定的なイメージを持っていた。さらにきょうだいがいると『行動特性』が高いが、他のイメージ因子には関連がなかった。きょうだい数も同様に一人っ子より二人が『行動特性』の得点が高かった。このことより『行動特性』のイメージは、日々の生活の中で十分接触し関わりあうことを通して、子どもの理解が深まりその特性であるすばやさ、意欲、勇敢さ、敏捷性、積極さなどのイメージが定着できるのだと考えられる。

高橋ら⁹⁾によれば、弟・妹や身近に関われる子どものいる学生の方が、いない学生より「子どもへの関心」「子どもの世話への関心」を持つという。しかし、今回の結果では、「子どもへの関心」と『行動特性』では、相関はみられず、『好感度』に弱い正の関連がみられた。「子どもへの関心」は、子どもを好き、かわいらしい、明るいなど子どもの特性の表面的なイメージの部分に影響すると考えられる。接触体験が増えるほど、子どもの多面的な理解は増すが、そのことが必ずしも子どもへの積極的な関心になるのではない。逆に子どもへの苦手意識となり、あまり関わりたくない気持ちになることも十分考えられる。そのことを踏まえ、学生には「子どもへの関心」を高めるだけでなく、子どもの行動の理解を通して子どもとの関わり方がわかるよう、子どもと関わるのが楽しいと思え、より積極的に関わりたいという思いにつながるような体験となるよう、臨地実習では留意する必要がある。

5 接触体験からみた子どもイメージ『自律性』

「泣いている赤ちゃんあやす」という接触体験項目で「経験あり」が『自律性』に否定的な得点となっていた。『自律性』因子のもつ否定的な側面は、子どもの落ち着きのなさやうるささ、感情的でわがまま、きたなさなどがあり、子どもと接触体験があるほど多面的に理解が深まることでイメージが形成される側面であると推察される。

今回の調査では、「10歳以上年の離れた弟・妹がいるか」という質問では、「いる」と答えたものは0.7%しかいなかった。花沢¹⁵⁾は、子どもの世話が可能

能なきようだい間の年齢差について具体的な年齢は記していないが児童期の接触体験が対児感情や育児動機に影響すると述べている。そのことをふまえ、質問項目では10歳以上の年齢差としたが、「年の離れた弟・妹の存在」の有無と子どもイメージそれぞれの因子に有意差はみられなかった。今回は対象者が少ないことも影響したとも考えられ、接触体験がどのような構造で対児感情や育児動機に影響しているか、今後の検討が必要である。

看護では、直接子どもに触れることを通して実践が可能となる。子どもの特性を多面的に理解し、より積極的に子どもに触れ、その時の子どもの反応をとらえ理解を深め、さらに関わろうとする気持ちへ転換できるような動機付けが必要と考える。

「わかる」ということは、一般性や抽象性を自分の理解としてどのように具体化できるか、そして他の人にもわかるようにどのように説明することができるかということ¹⁰⁾であり、実際の体験をおおして可能となる。子どもをわかるということは、子どもとの関わりの中で多面的に理解することでもある。看護実践にはそれが求められる。子どもの持つ特性である『行動特性』『自律性』のイメージの多面的な側面を、具体的な場面を通じた対応の仕方を学ぶことで、子どもと関わることの楽しさ、面白さがわかるよう、看護実践へのさらなる動機付けとなるように学生に伝えていきたい。

IV 結論

- 1) 接触体験で最も多い項目は、幼稚園や小学生の遊び相手「3歳ぐらいまでの幼児の遊び相手」、「赤ちゃんを抱く」であった。最も体験の少ない項目は、「赤ちゃんを半日以上一人で世話をする」「赤ちゃんをお風呂に入れる」「3歳ぐらいまでの幼児をお風呂に入れる」など長時間の世話や清潔に関する項目であった。
- 2) イメージ因子の一部に接触体験との関連がみられた。関連のあった接触体験は、「赤ちゃんを抱く」「泣いている赤ちゃんをあやす」「3歳ぐらいまでの幼児のトイレの世話をする」の3項目で、内容によりイメージに違いがみられた。
- 3) 子どもへの関心は「子どもが好き」「乳幼児に触れたい」「乳幼児と遊びたい」「守ってあげたい」といずれも高いが、接触体験との関係性はなかった。またイメージ因子との関係では、浅い関わりからくる子どもへの関心と考えられた。
- 4) 学生のもつ子どもイメージは、「かわいらしい」「好きな」「明るい」「活発な」など子どもの外観から受けるイメージが強く、「落ち着いた」「静かな」「理性的な」「思いやりのある」など子どもの

世話等を通し深く関わることで多面的な理解が得られる抽象的なイメージについては、むしろ接触体験と負の関係となることが示唆された。

- 5) きょうだいが多いほど子どもの行動をとおしその理解が肯定的なイメージとなっていた。(そのことは、子どもへの関心とはつながらず、むしろ苦手意識になる可能性もあることが示唆された。)

今回の調査では、学生自身の接触体験が少なく、結果的に対象者数として十分とはいえない項目もみられた。接触体験がイメージにどのように影響するのか、さらに検討が必要と考える。またイメージ因子は子どもの特性を多面的に把握することに有用であったが47項目と項目数が多いので精選できるようさらに検討していきたい。

引用文献

- 1) 大野祥子. 父親であること—子どもの養育者としての役割. 柏木恵子編, 結婚・家族の心理学. ミネルヴァ書房, 150-155, 1999
- 2) 吉武香代子. 小児看護の特徴と役割. 教育と医学研究会編, 現代人の心の支援シリーズ第1巻こころの発達をはぐくむ. 慶応義塾大学出版会, 238-261, 2002
- 3) 内山雅代, 古谷佳由理他. 小児看護実習における学生の子どもに対するイメージの変化について. 千葉大学看護部紀要, 15: 35-43, 1993
- 4) 中新美保子. 看護学生の子ども観の変化—小児看護履修前に視点を当てた10年前のとの比較—. 第25回日本看護学会 看護教育: 138-140, 1994
- 5) 釜島美千代, 中久喜町子. 小児看護実習前後の学生の子ども観と実習のとらえ方の変化. 山梨県立看護大学紀要, 5: 51-59, 2003
- 6) 遠藤芳子, 後藤順子. 小児看護学(幼稚園)実習の有効性の検討—実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から—. 山形保健医療研究, 第7号: 33-40, 2004
- 7) 藤原千恵子, 野村幸子. 子どもの認識に関する研究—学生の接触体験と関心—. 藍野学院紀要, 1: 77-84, 1987
- 8) 植木野裕美, 鈴木敦了他. 本学学生の子どもに対する接触体験と関心度・認識の状況(第2報)—家族変動と教育課程に焦点をあてた前回との比較検討—. 第26回日本看護学会 看護教育: 70-72, 1989
- 9) 高橋由紀子, 杉浦浩子他. 看護学生の子どもに対するイメージと関連要因. 岐阜大学医療技術短期大学紀要, 7: 21-31, 2000.
- 10) 河上智香, 藤原千恵子他. 4年生看護系大学の学生がもつ子どもイメージの構造. 第34回日本看

- 護学会 看護教育: 103-105, 2003
- 11) 井上正明, 小林利宣. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 日本教育心理学研究, 33(3): 69-76, 1985
- 12) 鈴木淳子. 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究, 65: 34-41, 1994
- 13) 山中久美子, 吉川彰二他. 本学学生の子どもへの関心と子ども理解への変化 - 小児看護学の講義前と実習後の質問紙による比較から - . 大阪府立看護大学紀要, 9巻1号: 15-23, 2002
- 14) 田中七重, 難波千恵子他. 看護学生の自我の発達 の度合いと小児に対するイメージの関連. 第25回日本看護学会 看護教育: 141-144, 1994
- 15) 花沢成一, 母性心理学. 医学書院, 医学書院, 82-84, 1998
- 16) 武田 忠. 学ぶ力を養う教育. 新曜社, p.37, 1998

表1 基本的属性

		N=141
属性	項目	人数 (%)
性別	男	15 (10.6)
	女	125 (88.7)
	NA	1 (0.7)
きょうだい数	1人	8 (5.7)
	2人	63 (44.7)
	3人	61 (43.3)
	4人	7 (5.0)
	NA	2 (1.4)
10歳以上離れた弟・妹の存在 n=133	いる	9 (6.8)
	いない	124 (93.2)
幼少期の母親の仕事の有無	働いていた	71 (50.4)
	専業主婦	68 (48.2)
	その他	2 (1.4)
幼児期の通園場所	幼稚園	104 (73.8)
	保育所	33 (23.4)
	両方	3 (2.1)
	通園せず	1 (0.7)
学童保育	通っていた	20 (14.2)
	通っていない	120 (85.1)
	その他	1 (0.7)
身近に3歳までの子どもの存在	いる	31 (22.0)
	いない	110 (78.0)
中学校や高校での保育実習体験 (触れ合い体験)	あり	75 (53.2)
	なし	65 (46.1)
	NA	1 (0.7)
保育実習の内容 n=75	子どもとの遊びや世話を 実際にした	74 (98.7)
	見学のみで直接の関わり なかった	1 (1.3)

表2 子どもに対するイメージ

因子 平均(SD)	項目 (形容対)		
行動特性 4.39 (0.72) α係数=0.84	すばやい—のろい たくましい—弱々しい 速い—遅い 強気な—弱気な はっきりした—ぼんやりした 鋭い—鈍い	頼もしい—頼りない 勇敢な—臆病な 強い—弱い おしゃべりな—無口な 積極的な—消極的な	意欲的な—無気力な はげしい—おだやかな 外交的な—内向的な 敏感な—鈍感な 優れている—劣っている 16項目
好感度 5.89 (0.73) α係数=0.91	好きな—嫌いな 良い—悪い 明るい—暗い 活発な—不活発な 楽しい—苦しい	愉快的な—不愉快的な 陽気な—陰気な 気持ちの良さ—気持ちの悪さ 生き生きした—生氣のない	かわいらしい—憎たらしい 暖かい—冷たい やわらかな—かたい 元気な—疲れた 13項目
自律性 3.17 (0.74) α係数=0.76	落ち着いた—落ち着きのない 安定した—不安定な きちんとした—だらしない きれいな—きたない	静かな—うるさい まとまった—バラバラな 責任のある—無責任な 清潔な—不清潔な	理性的な—感情的な 思いやりのある—わがままな 親切な—不親切な 11項目
情緒性 5.37 (0.72) α係数=0.69	優しい—厳しい やさしい—こわい 新しい—古い 豊かな—貧しい	幸福な—不幸な 丸い—四角な 広い—狭い	7項目

表3 きょうだいとイメージ因子の関連

N=141

属性	項目	n	イメージ因子 平均 (SD)			
			行動特性	好感度	自律性	情緒性
きょうだい	いない	8	3.72 (1.09.00)	5.04 (1.58)	3.00 (0.61)	4.71 (1.24)
	いる	132	4.43** (0.68)	5.94 (0.62)	3.19 (0.75)	5.42 (0.66)
	NA	1				
きょうだい数	一人	8	3.72 (1.09)	5.04 (1.58)	3.00 (0.61)	4.71 (1.24)
	二人	63	4.47 (0.64)	5.95 (0.57)	3.28 (0.79)	5.46 (0.59)
	三人	61	4.37 (0.72)	5.93 (0.65)	3.17 (0.65)	5.37 (0.71)
	四人	7	4.62 (0.66)	6.08 (0.84)	2.70 (1.04)	5.51 (0.93)
	NA	2				
10歳以上離れた弟・妹の有無 (n=133)	いる	9	4.63 (0.70)	6.19 (0.35)	3.08 (0.76)	5.81 0.45
	いない	124	4.42 (0.68)	5.9 (0.67)	3.2 (0.75)	5.37 0.68
中学・高校における保育実習体験	あり	75	4.49 (0.69)	6.00 (0.56)	3.18 (0.86)	5.47 (0.65)
	なし	65	4.28 (0.75)	5.78 (0.87)	3.17 (0.59)	5.28 (0.78)
	NA	1				

* P<0.05, **P<0.01

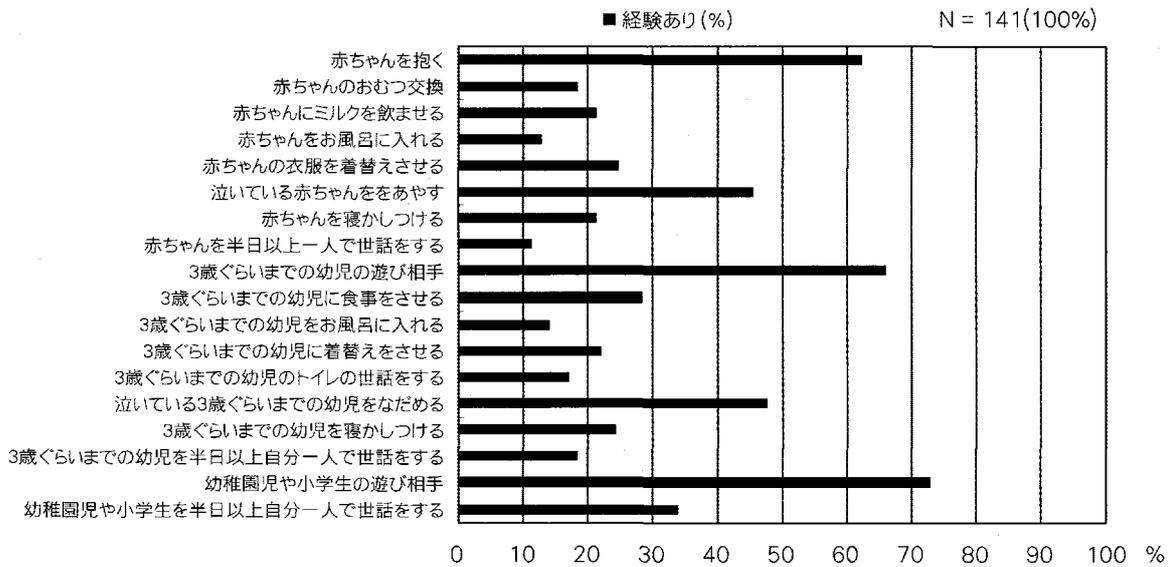


図1 子どもとの接触体験

表4 接触体験とイメージ因子の関連

N=141

接触体験内容	n	イメージ因子 (項目平均)			
		行動特性	好感度	自律性	情緒性
1 赤ちゃんを抱く	1 経験なし 53	4.30 (0.81)	5.73 (0.86)	3.24 (0.92)	5.20 (0.82)
	2 経験有り 88	4.44 (0.56)	5.99 (0.62)*	3.14 (0.62)	5.48 (0.64)*
2 赤ちゃんのおむつ交換	1 経験なし 115	4.35 (0.74)	5.85 (0.75)	3.19 (0.74)	5.34 (0.72)
	2 経験有り 26	4.58 (0.61)	6.08 (0.61)	3.12 (0.75)	5.52 (0.70)
3 赤ちゃんにミルクを飲ませる	1 経験なし 111	4.34 (0.73)	5.87 (0.74)	3.18 (0.76)	5.34 (0.73)
	2 経験有り 30	4.56 (0.65)	5.96 (0.70)	3.15 (0.67)	5.50 (0.68)
4 赤ちゃんをお風呂に入れる	1 経験なし 123	4.37 (0.73)	5.87 (0.73)	3.19 (0.76)	5.37 (0.73)
	2 経験有り 18	4.51 (0.64)	6.00 (0.75)	3.02 (0.59)	5.41 (0.65)
5 赤ちゃんの衣服を着替えさせる	1 経験なし 106	4.33 (0.74)	5.84 (0.74)	3.17 (0.77)	5.31 (0.72)
	2 経験有り 35	4.58 (0.64)	6.03 (0.69)	3.18 (0.67)	5.55 (0.70)
6 泣いている赤ちゃんをあやす	1 経験なし 77	4.36 (0.83)	5.80 (0.82)	3.29 (0.83)	5.27 (0.77)
	2 経験有り 64	4.42 (0.57)	6.00 (0.59)	3.04 (0.61)*	5.49 (0.64)
7 赤ちゃんを寝かしつける	1 経験なし 111	4.36 (0.74)	5.84 (0.75)	3.22 (0.77)	5.35 (0.74)
	2 経験有り 30	4.51 (0.66)	6.06 (0.65)	3.02 (0.64)	5.47 (0.64)
8 赤ちゃんを半日以上一人で世話をする	1 経験なし 125	4.37 (0.74)	5.89 (0.77)	3.18 (0.77)	5.38 (0.74)
	2 経験有り 16	4.56 (0.51)	5.89 (0.63)	3.10 (0.54)	5.29 (0.60)
9 3歳ぐらまでの幼児の遊び相手	1 経験なし 48	4.43 (0.69)	5.85 (0.73)	3.33 (0.89)	5.38 (0.76)
	2 経験有り 93	4.37 (0.74)	5.91 (0.74)	3.10 (0.65)	5.34 (0.71)
10 3歳ぐらまでの幼児に食事をさせる	1 経験なし 101	4.32 (0.69)	5.83 (0.64)	3.08 (0.75)	5.30 (0.66)
	2 経験有り 40	4.56 (0.77)	60.3 (0.91)	3.15 (0.73)	5.54 (0.84)
11 3歳ぐらまでの幼児をお風呂に入れる	1 経験なし 121	4.36 (0.73)	5.87 (0.73)	3.23 (0.74)	5.36 (0.74)
	2 経験有り 20	4.59 (0.65)	6.00 (0.72)	2.81 (0.65)	5.44 (0.64)
12 3歳ぐらまでの幼児に着替えをさせる	1 経験なし 110	4.34 (0.72)	5.84 (0.74)	3.19 (0.76)	5.31 (0.71)
	2 経験有り 31	4.56 (0.69)	6.08 (0.68)	3.13 (0.70)	5.59 (0.72)
13 3歳ぐらまでの幼児のトイレの世話をする	1 経験なし 117	4.32 (0.72)	5.83 (0.73)	3.18 (0.76)	5.32 (0.72)
	2 経験有り 24	4.74 (0.60)**	6.17 (0.66)*	3.14 (0.69)	5.61 (0.72)
14 泣いている3歳ぐらまでの幼児をなだめる	1 経験なし 74	4.42 (0.70)	5.85 (0.71)	3.28 (0.80)	5.32 (0.69)
	2 経験有り 67	4.36 (0.75)	5.93 (0.76)	3.06 (0.66)	5.43 (0.75)
15 3歳ぐらまでの幼児を寝かしつける	1 経験なし 107	4.36 (0.76)	5.84 (0.76)	3.20 (0.78)	5.35 (0.76)
	2 経験有り 34	4.48 (0.60)	6.03 (0.60)	3.10 (0.83)	5.45 (0.60)
16 3歳ぐらまでの幼児を半日以上一人で世話をする	1 経験なし 115	4.36 (0.75)	5.88 (0.77)	3.21 (0.76)	5.40 (0.74)
	2 経験有り 26	4.51 (0.59)	5.93 (0.55)	3.02 (0.68)	5.27 (0.64)
17 幼稚園や小学生の遊び相手をする	1 経験なし 38	4.37 (0.65)	5.89 (0.77)	3.26 (0.91)	5.29 (0.73)
	2 経験有り 103	4.40 (0.75)	5.89 (0.72)	3.14 (0.67)	5.40 (0.72)
18 幼稚園児や小学生を半日以上一人で世話をする	1 経験なし 93	4.32 (0.77)	5.88 (0.77)	3.17 (0.76)	5.37 (0.73)
	2 経験有り 48	4.53 (0.59)	5.92 (0.65)	3.18 (0.73)	5.38 (0.71)

** p<0.01, * p<0.05

表5 乳幼児への関心とイメージ因子の関連

項目	n	%	イメージ因子 平均(SD)			
			行動特性	好感度	自律性	情緒性
n=61						
乳幼児が好き						
まったく違う	0					
どちらかという違う	1	(1.6)	3.75	4.46	2.73	4.00
どちらかというあてはまる	24	(39.4)	4.59 (0.72)	5.95 (0.48)	3.27 (0.96)	5.48 (0.70)
とてもあてはまる	36	(59.0)	4.19 (0.89)	5.78 (0.89)	3.07 (0.65)	5.32 (0.86)
乳幼児に触れたい						
まったく違う	0					
どちらかという違う	2	(3.2)	4.66 (1.28)	5.50 (1.47)	2.14 (0.84)	5.07 (1.52)
どちらかというあてはまる	22	(36.1)	4.60 (0.72)	5.95 (0.49)	3.38 (0.84)	5.47 (0.71)
とてもあてはまる	37	(60.7)	4.16 (0.86)	5.76 (0.88)	3.05 (0.70)	5.31 (0.85)
乳幼児と遊びたい						
まったく違う	0					
どちらかという違う	4	(6.5)	4.22 (0.96)	5.62 (0.87)	2.32 (1.00)	5.32 (0.99)
どちらかというあてはまる	22	(36.1)	4.53 (0.63)	5.90 (0.48)	3.28 (0.64)	5.34 (0.67)
とてもあてはまる	35	(57.4)	4.23 (0.94)	5.80 (0.91)	3.15 (0.80)	5.38 (0.89)
守ってあげたい						
まったく違う	0					
どちらかという違う	3	(4.9)	4.54 (0.97)	5.77 (0.67)	2.85 (1.14)	5.14 (0.87)
どちらかというあてはまる	23	(37.7)	4.49 (0.68)	5.87 (0.53)	3.22 (0.62)	5.40 (0.71)
とてもあてはまる	35	(57.4)	4.22 (0.92)	5.79 (0.91)	3.12 (0.86)	5.36 (0.89)

n.s

表6 接触体験,子どもへの関心とイメージ因子の相関

接触体験,イメージ因子	平均値 (SD)	相関係数	行動特性	好感度	自律性	情緒性	乳児との接触体験	幼児との接触体験	幼稚園・小学生との接触体験	乳児が好き	乳幼児に触れたい	乳幼児と遊びたい	守ってあげたい
行動特性	4.39 (0.72)	r	1.00										
好感度	5.89 (0.73)	r	.51(**)	1.00									
自律性	3.17 (0.74)	r	.17(*)	.17(*)	1.00								
情緒性	5.37 (0.72)	r	.44(**)	.81(**)	.20(*)	1.00							
乳児との接触体験	2.44 (1.05)	r	.20(*)	0.16	-0.04	0.16	1.00						
幼児との接触体験	2.56 (1.08)	r	0.15	0.09	-0.08	0.05	.88(**)	1.00					
幼稚園・小学生との接触体験	3.44 (1.09)	r	.22(**)	0.12	0.03	0.10	.56(**)	.61(**)	1.00				
乳児が好き	3.56 (0.55)	r	0.00	.27(**)	0.01	.18(*)	0.11	0.11	0.15	1.00			
乳幼児に触れたい	3.57 (0.56)	r	-0.25	-0.06	-0.05	-0.05	-0.19	-0.16	-0.09	.83(**)	1.00		
乳幼児と遊びたい	3.51 (0.62)	r	-0.11	0.00	0.12	0.03	-0.12	-0.16	0.07	.87(**)	.77(**)	1.00	
守ってあげたい	3.52 (0.59)	r	-0.16	-0.03	0.00	0.02	-0.04	-0.09	0.12	.61(**)	.73(**)	.71(**)	1.00

r =ピアソンの相関係数 **p < 0.01, *p < 0.05

The Relationship between Nursing Students' Image of Children and Previous Experience of Contact with Children

Sachiko NOMURA*¹ Chika KAWAKAMI*²
Noriko HASE*³ Chieko FUJIWARA*²

*1 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

*2 Osaka University Graduate School of Medicine, Course of Health Science

*3 International Buddhist University

Received 12 September 2006

Accepted 12 December 2006

Abstract

The purpose of this research was to examine the relation between the students' image of children before attending the lectures on child nursing and their previous experience of contact with children. The subjects of the research were 143 nursing students who agreed to the research at two universities. The measurement of the image of children involved a questionnaire consisting of 47 adjectives vs. four factors. And the measurement of experience of previous contact with children involved a questionnaire composed of 18 items concerning experience of contact with babies to children. The most common items checked in experience of contact were "holding a baby" and "being a child's playmate". Experience of other contacts was limited.

A positive image of children's behavioral features appeared to be linked to the number of the subjects' siblings and the amount of experience of contact. Apart from this, no other relations emerged as image factors. Moreover, there was no relationship between experience of contact and interest and concern for children. Rather, it seemed that a large amount of previous contact with children was connected to the awareness of difficulties. Although it became clear that students had a high level of interest and concern, their image of children came from shallow and superficial relations.

Key words : student nurse, child, image, experience of contact with children